

「断尾とバターの約束」

—初稿—

2026/3/11
雨森 れに

〈人物表〉

あるが
有賀 啓晶

(27) ペンションオーナーの息子

バトルル

(33) 従業員。在日歴6年のモンゴル人

1. ペンション・啓晶の私室（朝）

ペンション内にあるオーナー家族専用の私室。壁には有賀啓晶（27）の写真が複数貼ってある。どれもサモエド犬のホルンと写っており、客や従業員、両親などもいる。アラーム音。啓晶、目を覚ます。

2. ペンション・外観（朝）

スキー場近くのペンション「アルガ」。一面の雪景色。風がなく、朝日に雪が輝いている。

3. ペンション・玄関（朝）

啓晶、ドッグフード入りのエサ入れを持っている。歓迎看板を確認。予約なしに軽く頷く。ダウンを着て外へ。

4. ペンション・駐車場（朝）

止まっている車は一台のみ。先ほど着いた様子。啓晶、鼻歌を歌いながら横断。ペンションの裏側へ。

5. ペンション・倉庫・外（朝）

大型の倉庫。啓晶、鼻歌を歌いつつ扉を開ける。エサ入れを落とす。雪の上にドッグフードが散らばる。

6. ペンション・倉庫・室内（朝）

大型の石油ストーブが焚かれている。啓晶、ホルンに顔を埋めている。バトール（33）が倉庫に入ってくる。啓晶の横にしゃがみ、

バトール「ここでは、死んだらどうする?」

啓晶、そのままの体勢で答える。

啓晶 「燃やすか埋める」

バトル 「それは人じゃなくて？」

啓晶 「ペットも一緒」

バトル 「じゃあホルンはどっちにする？」

啓晶、キツと顔をあげる。

啓晶 「まだ決めてないし、バトルには関係ない」

と、バトルがバターの箱を持っているのに気づく。

啓晶 「なに、それ。どういうこと？ ホルンを食べるわけ？」

啓晶、ホルンを抱き寄せる。

バトル、慌てて手を振る。

バトル 「違う違う。モンゴルの、犬が死んだらあげるやつ」

啓晶 「俺にくれるってこと？」

啓晶、手を差し出す。

が、バトルはそれを押し返す。

バトル 「それも違う。ホルンがあつちで食べ物に困らないよう

にだから」

啓晶 「へえ。モンゴルにもそういう概念あるんだ」

バトル 「モンゴルでは、犬は人に生まれ変わるって信じてる。

だから、それまでお腹が空かないようにね」

啓晶 「じゃあ俺も犬だったのかも。バター好きだし」

バトル 「俺も犬だったと思う」

啓晶 「バトルのバター茶、おいしいもんな」

啓晶、ホルンを見る。

啓晶 「人間になって帰ってくるか？」

バトル 「モンゴルみたいにする？」

啓晶 「モンゴルは燃やす？ 埋める？」

バトル 「そのまま腐らせる」

啓晶 「それは……日本だどうなんだろう。埋めるじゃだめ？」

バトル、肩をすくめる。

バトル 「郷に入っては郷に従え」

啓晶 「それ、バトルがよく言われているやつじゃん」

バトル、にやりと笑う。

啓晶、つられて笑い、肩の力を抜く。

啓晶 「さつきは関係ないって言って、ごめん」
バトール 「いいよ。問題ない」

バトール、バターの箱をどうする？と掲げる。

啓晶、手を伸ばす。

7. 雪原(朝)

倉庫から少し離れた場所。

啓晶とバトールが歩いている。

ふたりは赤いソリを引いており、そこにはホルンが寝かされている。ホルンの足元には雪とバターの箱。

啓晶 「なんでバター溶けてんだよ。どこ入れてたんだよ」

バトール 「胸のポケット」

バトール、自身の胸を指さす。

バトール 「車の中では助手席」

啓晶 「ってことは一時間以上あったためたわけね」

バトール 「すぐお茶になる」

啓晶、うんざりした顔。

ふたりは小高い丘を指す。

足とソリの跡を残しながら。

8. 丘(朝)

スキー場から離れた場所。

頂上には木が数本。風が雪を散らす。

啓晶、木の根元にホルンを置く。

線香を取り出し、点火。雪に刺す。

ホルンに手を合わせる。

ゴリゴリという音。

啓晶、顔をあげる。

目の前に赤い雫が垂れ、ホルンの尾が落ちる。

啓晶 「何で——」

啓晶、バトールを見る。

バトールの手にナイフがある。

思わず掴みかかる。

啓晶 「何で尻尾切ったんだよ！」

バトル「人になるため」

啓晶「はっ？」

バトル「尻尾あるまま人になったら困る」

啓晶「尻尾がある人間なんていねえよ！ 戻せよ！ かわいそうだろ！」

啓晶、バトルを強く揺さぶる。

バトル、啓晶とホルンを交互に見る。

申し訳なきように、

バトル「ごめん。モンゴルみたいにしたいのかと思ってた」

啓晶、はっとして手を緩める。

バトル「戻せない。ごめん」

啓晶、バトルから離れる。

啓晶「俺のほうこそごめん。なんか、今日ダメだわ」

バトル「問題ない。ケイドウに確認しなかった俺が悪い」

啓晶「や、埋めるまではモンゴル式でやりたいって言ったの俺だよ？ バトーは悪くない」

バトル、少し考えて、

バトル「どっちも悪い。ホルンのためにならない」

啓晶、ホルンと尻尾を見下ろす。

線香が消えてしまっている。

啓晶「そうだな」

啓晶、線香に火を点けようとする。

が、風に煽られうまく点かない。

諦め、バターの箱を取り出す。

バトル、バターを貰い、一口サイズに切る。

ホルンの口にくわえさせ、囁く。

バトル「いい人になって戻ってこい。また一緒に過ごそう」

啓晶、歯を食いしばる。

上を向く。青空。

9. 回想・丘（昼）

夏の青空。丘は植物に覆われている。

緑の中を駆ける白い犬。ホルンである。

ホルン、止まってこちらを見る。

黒い瞳と鼻が呼んでいるかのよう。
啓晶、走り出す。
ホルン、啓晶に飛びつく。
啓晶、倒れる。
ホルンに舐めまわされる。
(回想終了)

10. 丘(昼)

雪の上で動かないホルン。
啓晶、ホルンを撫でる。

何度も撫で、ゆっくりと抱きしめる。

バトルル、静かに見守る。

啓晶の嗚咽。徐々に大きくなる。

バトルル、啓晶をホルンから離す。

啓晶、首を振る。

啓晶 「人間じゃなくてもいい。戻ってきてほしい」

バトルル 「ケイドウ、それは無理だ」

啓晶 「わかってる。わかってるけど……」

啓晶、顔を覆う。

バトルル、切った尾をホルンの頭の上に置く。

バトルル 「尾を切るの、役割がなくなるから。犬の役割がなくなれば、家族になれる」

啓晶、バトルルを見上げる。

啓晶 「家族……？」

バトルル 「将来、ケイドウの家族として戻ってくる。だから、待てばいい」

啓晶、ホルンを見る。

ホルンは安らかな顔をしている。

啓晶、「待ってるよ」と呟く。

が、強風が吹き、声はかき消される。

11. 丘(昼)

十年後。

緑の中を駆けまわる子供と啓晶。

おわり